

アドルフォ・バラビーノのピアノ

アドルフォは、とても静かな人だ。
こちらの目をじっと見つめて、静かに話す。
彼の暮らすイギリス南部の森や牧草地に囲まれた豊かな自然の中では、
雨音や小鳥のさえずりや、木々の梢を揺らす風の音もまた、
彼にとっての大切な音たちであり、
それを遮る余分な音など全く必要ないのだ。

アドルフォのピアノもまた、静かだ。
隣の部屋から流れてくる彼が弾くショパンは、
まるで細い蜘蛛の糸に下りた夜露が真珠のように小さく連なって、
朝の透明な光に輝き始めたのを見るかのように、
儂く美しい。
やがて陽が昇れば消えてしまうその真珠たちのつかの間の輝きは、
とどめておくことのできない時間の流れを内包しているからこそ、
小さくとも強い輝きを放つのだ。
それは、決してあらゆる人にとって直ちに心奪われる景色ではないかもしれない。
でも、一旦その美しさに気付いた人にとっては、
もはや、彼の音以外は受け入れがたいと思われるほど、
強烈な印象となって心に刻まれる。

アドルフォのフォルテは、決して叫ばない。
どんな高みに向かう時でも、
決して激昂して鍵盤をたくことではない。
しかし、そこに込められた情熱は、怒りは、哀しみは、畏れは、
爆発することの許されない極度の緊張の中に表現されるからこそ、
一層深い慟哭を、聴くものにもたらすのだ。

聴衆を圧倒するような超絶技巧や、輝かしい数々の有名コンクール受賞歴、
または、はち切れんばかりの若々しさや大音量の迫力、
そうしたもので聴衆の大喝采を浴びるタイプのピアニストではない。
でもこうした華々しさから少し離れて、自身の心に本当に素直になってみたときに、
魂の内面にじっくりと語りかけてくれるのは、
アドルフォのようなピアニストなのではないだろうか。

2017年Barabino／Kawashima来日公演日程

- 11月20日(月) 札幌コンサートホールKitara小ホール
- 11月24日(金) 名古屋・電気文化会館ザ・コンサートホール
- 11月27日(月) 奈良県大和郡山市・DMG MORIやまと郡山城ホール
- 11月30日(木) 東京・浜離宮朝日ホール
(名古屋・奈良・東京公演のチケット取扱いは、KCMチケットサービス Tel.0570-00-8255)

川島美樹(ピアノ) Miki Kawashima, piano

英国ランシング・カレッジ卒業。在学中2013,2014年にMusic Performance Award を2年連続受賞。

2013年英国ファーナム・コンペティティブ・ミュージック・フェスティバル、シニアリサイタル／ピアノ部門で優勝、Young Musician Award 2013及び全部門最高賞としてJune Fielding Bursary(特別奨学金)を獲得、フェスティバルコンサートの演奏者として招かれた。

また、この時のラヴェルとリヤプノフの卓越した演奏により、英国で最も古い歴史を持つ室内管弦楽団London Mozart Playersとの共演機会を与えられ、2015年6月モーツアルトのピアノ協奏曲第9番で英国デビュー、好評を博す。2016年には、師であるアドルフォ・バラビーノのデュオ・パートナーとしてイタリア、日本でのコンサートに共演、仙台市の慈眼寺におけるチャリティーコンサートの模様は、FM仙台で放送された。

英国ギルドホール音楽院を経て、現在、アドルフォ・バラビーノにピアノを、アルベルト・アルコーザに作曲及び音楽理論を師事している。

アドルフォ・バラビーノ(ピアノ)

Adolfo Barabino, piano

イタリア・ジェノバに生まれ、パガニーニ音楽院でエミリオ・ボニーノに師事する傍ら、アンジェイ・ヤシンスキのもとで研鑽を積んだ。15歳のときに「Citta di Stresa International Piano Competition」で優勝、その後ミュンヘンにおける「European Selection Winners & Masters」でも優勝し、ヨーロッパ各国で積極的な演奏活動を開始した。

現在、クラウディオ・レコードの専属アーティストとして、ショパン全作品の録音に取り組んでいる。2014年に録音したロンドン交響楽団とのショパンピアノ協奏曲第2番のCDは、ウラディーミル・アシュケナージ氏に「音楽と演奏者が完全に一体化した演奏」と絶賛された。

このほか、スペインのRadio Classica では数多くのライヴ録音を行い、フランスのCanal 2 でのラヴェル作品の演奏がテレビ放映されたほか、ショパンの2つのピアノ協奏曲をヴェネズエラ、リマ、キューバの交響楽団と共に演奏し、その様子は南米各国で国営放映された。2014年には、奈良市における「奈良ピアノフレンズ」に外国人アーティストとして初めて招かれて日本の様々なジャンルのピアニストと共に演奏し、その様子は毎日放送でインタビューとともに放映された。

これまでヨーロッパでは、ロンドンのウイグモア・ホールをはじめとする数多くの主要都市でリサイタルを開催するとともに、ブダペスト祝祭管弦楽団、ルーマニア国立放送管弦楽団、マルキジアナ・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団と共に演奏している。

このような演奏活動に加え、各国でマスタークラスを行い、鍵盤というものに対する研究法、そして「伝達の手段としての音」に関する講座を数多く開いている。イギリス南部サセックス州のアーディングリー・カレッジで年3回行っているマスタークラスには、毎回ヨーロッパ各国や日本から様々な目的を持った受講生が集う。すでにプロとして活躍しているピアニストの参加も多数。音楽的な表現を大切にするその指導法は、日本の国内コンクールで優勝歴のある受講者にも大変好評で、「今までに受けたどのレッスンよりも感銘を受けた」と評された。

洗練された音と卓越した技巧、そして深い知性と感受性に裏打ちされた解釈により、現代における最もすぐれたショパンの演奏家の一人として高く評価されているピアニストである。そのデリケートでニュアンスに溢れた音色は、「ベルベット・タッチ(velvet touch)」と評されている。

